

町在より願に寄て、桑百萬本、棟百萬本、楮百萬本、諸所の空地に植ける、亦小出村といふ所に、農民救米の藏を建られければ、庶民思ひくに糲を上納す、此時美作巡見して感悅し、自ら酒器を執て民に飲じめけるとなり。

〔牧民金鑑十一〕天明八申年九月廿九日

一夫食貯方之儀は、稗を第一ニいたし、其外麥、粟、大根、切干の類、何によらず於其所夫食ニ可相成品は、木の根葉、田にし、海草之類ニ而も、取集候積、土地柄相糺、米澤山之場所は、糲并雜穀の類も、百姓持高ニ應じ爲差出候歟、又は男女壹人ニ付何程ヅ、とか爲差出、右に准じ根葉并田にし、海草之類も、程を極爲差出、圍置候積、其土地に隨ひ、書面之外ニも、夫食ニ可相成品可書出事、

〔徳川禁令考五十一〕寛政元酉年自三月至十二月 町觸

凶年手當之ため米雜穀貯置之事

當地坂○大三郷町中之者共、凶年可及饑餓砌爲御手當永續之ため、此度公儀御入用を以、天満川崎ニ有之奉行所支配勘定場空地江、新規土藏取建、米雜穀御買上ニ而被詰置、猶又御入用を以被仰付候間、此旨令承知御仁惠之程得と相辨、一同難有可奉存候、且又右ニ付而ハ三郷市中之者儀も、一己之存寄に隨ひ候共、一町申合候共、勝手にいたし、金銀錢又は米雜穀納置度存候者共ハ、少少宛ニ而も不苦候間、志次第右役所江相納可申候、尤御手當之儀、追而ハ米穀ニ可被仰付候得共、御趣意有之先此度ハ米穀雜穀取交御買詰被仰付候、

右之通江戸より依御下知申渡候、尤格別之御趣意を以、三郷之ものども饑饉之節、御手當として永續之ため、被仰付候事ニ候間、御仁惠之程厚難有奉存、町中末々之者ども迄不洩様可申聞候、

酉三月十四日